

II サムエル14章「赦さないことからの苦しみ」

人を赦すということは本当に難しいことだと思います。けれども、赦さないでいることは、自分自身を痛めつけ、苦しめることになります。赦されない苦しみもありますが、赦さないことによる苦しみもあります。

神、主はそのような苦しみからも私たちを解放してくださいます。そして助けを与えてくださいます。

1. ヨアブの策略（：1～17）

1節。「王の心がアブサロムに向いている」とはダビデの複雑な思いだったのでしょうか。アブサロムが兄アムノンを殺した罪に対して裁きを下さなければなりません。同時に、アムノンがいなくなつた今、アブサロムが王位継承者となりました。ダビデには怒りや疑いがあったでしょう。それと共に息子に対する愛情もあつたでしょう。そして、逃げて行ったアブサロムが何を考えているか分からずに不安もあつたでしょう。それでも、自分の中で考えているだけでなく、アブサロムと向き合って、自分の思いを伝えるべきだったでしょう。

何の行動もしようとしない王のことを見かねて、将軍ヨアブが解決を図ろうとします。王と国の状態を憂いて、王位継承のことを見据えて、ダビデとアブサロムが和解できるようにと考えたのでしょうか。彼はテコアから一人の知恵のある女性を選んで連れて来て、筋書きを与えて、王に訴え出るようにさせます。このままでは残っている一人の息子までいなくなり、家系が途絶えて、相続地を失ってしまう。例外的な扱いしてくださるように王に求めるのです。

ダビデ王は、この訴えを第三者として聞いており、「家に帰りなさい。あなたのことで命令を出そう」と言って、早々に片付けようとします。女性は、律法に従わずに例外的な裁定をするとしても、その罰は王ではなく、自分と自己の一族にあると言います。それで王は、「あなたに文句を言う者」がいれば、私のところに連れて来なさいと言って、自分が責任を負うと言います。

それでも女性は、ダビデの裁定が神、主の前におけるものでないので、律法に従って「血の復讐をする者が息子を打とうとしたら、息子が守られないと心配し、神、主の前で具体的に裁きを定めることを求める。それで王は「主は生きておられる。あなたの息子の髪の毛一本も決して地に落ちることはない」と言って、主の前での裁きとして、はつきりと言い渡します。

作り話でなければ、ここで母親は喜んで帰って行ったでしょう。しかし、この話はたとえ話であって、この話を通してダビデに自分自身のことを省みてもらうことが本来の目的です。女性はなおも話を続けます。

あくまでも丁寧で謙虚な話し方であり、直接名前は出しませんが、13節の終わりにあるように、「王様は追放された者を戻しておられません」とダビデ自身の態度に対して踏み込みます。ここまで女性の訴えを聞いていたダビデは、女性の話を自分とアブサロムのことに結びつけていたかもしれません、ここではつきりと突きつけられました。

それでも女性は、人間的なことだけで話を進めません。また、ダビデを一方的に責めるのでもありません。「私たち」と言って、共に神の前に立とうとします。14節の後半で「神はいのちを取り去らず、追放されている者が追放されたままにならないように、ご計画を立ててくださいます」と言います。神の計画があることに心を向けさせます。

かつて預言者ナタンがたとえ話によってダビデの罪を指摘したときと似ています。今回はヨアブが仕組んだことではありますが、この知恵のある女性を用いて、主は動かないままでいるダビデを動かそうとしておられたのです。このような女性の訴えを聞いて応答する過程で、ダビデは自分自身の問題を冷静に客観的に省みることができたのだと思います。

2. アブサロムの苦しみ（：18～27）

ダビデはこの女性が訴えに来たことの真意を悟ります。「これはすべて、ヨアブの指図によるのであろう」と言います。それに答えて、女性はヨアブに命じられ、たとえ話を教えられたことを明かします。そして、20節で「王様の家来ヨアブは、事の成り行きを変えるために、このことをしたのです」と言います。ヨアブの思いは人間的なことが大きかったのではないかと想像します。しかし、主はヨアブのとったこの対応を用いて、ダビデに働きかけたのだと思います。

女性が王に訴えていたその場所にヨアブもいたのでしょう。21節。こうして、ヨアブはすぐにゲシュルに行き、アブサロムをエルサレムに連れて来ました。ところが、ダビデは「あれは自分の家に行ってもらおう。私の顔を見ることはならぬ」と言って、アブサロムに会うことはありません。結局ダビデは、アブサロムの帰国を許可したけれども、彼がアムノンを殺したことを赦してはいなかったのです。

その後の25節から27節には、アブサロムの容姿などについて記されています。アブサロムは実に美しい人で、全身に非の打ちどころがなかったと言われています。このことが書かれているのは、次の15章に記されていることにつながる備えとなっています。アブサロムが「イスラエルの人々の心を盗んだ」ことの一つの要因に、外見の魅力があったということです。

このようにアブサロムについての情報がここに書かれているのは、アブサロムがエルサレムに帰ってから次に記される出来事まで2年経ったということを表す挿入だったのでしよう。そして、15章以降にもアブサロムに関わる出来事が続いて記されていくのですが、その備えとなっているのです。

ダビデがアブサロムに会おうとしないまま2年が過ぎました。ダビデはここでもアブサロムに対して何の行動もとりません。テコアの女のたとえ話を通して、自分のことを省みるように働きかけた神、主の導きを感じたかもしれません、ダビデは主に向かってみこころを尋ね求めることをしなかったようです。神に求めず、内向きになり、複雑な思いの中でさらに傷を深くしているようです。そのダビデはさらに神の取り扱いを受けなければならないのです。

一方、アブサロムも苦しんでいました。父ダビデに会って、ことばを交わし、心を通じ合わせたいと願っています。けれどもダビデは一向に振り向いてくれず、怒りや憎しみも起こってきたでしょう。自分を連れ戻してくれたヨアブに間に入ってもらいたいと思い、ヨアブのもとに人を遣わしましたが、彼は来ようとしませんでした。ヨアブとしては、両者の和解の見込みがないと思ったのか、関わるならダビデの怒りを買うことになりかねないと思ったのか、アブサロムに近づこうとしません。しびれを切らしたアブサロムは、ヨアブの畠に火をつけるという暴挙に出ます。たまらずにヨアブはアブサロムのところに来て、抗議します。アブサロムは、王に会えるように取り次いでもらいたいと求めます。「もし私に咎があるなら、王に殺されてもかまわない」と、罪の罰を受けることを覚悟した必死の願いを受けて、ヨアブはやむなく王のところに行き、仲介します。

33節。こうしてダビデとアブサロムは会見しました。しかし、ここに両者のことばは記されていません。ダビデはアブサロムに口づけしました。和解のしるしです。けれども、そこには親愛の情は感じられません。それぞれになおも苦しみを抱えています。本当の赦しと和解には遠かったのです。

私たちも自己や他者の罪をそのままにせずに向き合い、主の前で解決を得ることを求める必要があります。主の前の解決とは、主の正義と愛が表されることです。罪は神の御前で正しく、ふさわしく裁かれなければなりません。しかし、神は罪人をあわれみ、赦しを備えてくださいました。贖いの子羊の血による赦しに向かう必要があります。私たちには神の恵みによってイエス・キリストの十字架による完全な赦しが備えられているのです。

私たちが自分の問題に向き合うことを避けているときに、主は私たちに働きかけてくださいます。みことばによって客観的に教えてくださり、そして私たち自身の問題に心を向けさせてくださいます。具体的に用いられるのは礼拝や集会でのメッセージであったり、信仰書であったり、信仰の友の助言であったりするでしょう。そのように与えられる神の働きかけを受け止めて、自分を省みることができるようになると願います。

人を赦すことが難しい場合があります。主の祈りにおいて、「私たちの負い目をお赦しください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します」と繰り返し祈る大切さを思います。

まず自分自身が赦しを求め、主によって赦されていることをしっかりと受け止める必要があります。イエス・キリストの十字架の贖いを感謝して、神の恵みを受け止めることです。その上で、人の罪を赦すことができるよう祈りましょう。